

# 「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第2期第2号—通巻第15号—)

## 投稿論文 2

大内秀明

(東北大名誉教授 ouchi@miyakencenter.or.jp)

もう一つの「惜別」—由其民と宇野弘蔵

『宇野理論を現代にどう活かすか Working Paper Series』

2-2-4

[http://www.unotheory.org/news\\_II\\_2](http://www.unotheory.org/news_II_2)

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail: [contact@unotheory.org](mailto:contact@unotheory.org)

ホームページ <http://www.unotheory.org>

「戦争前夜 師弟のきずな―旧東北帝大 中国人留学生の手記見つかる」

このような見出しで、去る9月4日(土)の『河北新報』(仙台で発行のローカル紙)の社会面トップに、本「ニュースレター」で柴垣和夫氏が紹介の労をとってくれた「由基民く七十年前の日中師弟縁―宇野弘蔵先生の追憶」の内容が、4段抜きで大きく紹介された。紙面には、これまた柴垣氏の手を煩わせたが、元天津社会科学院日本研究所長の周啓乾教授から送付された『日本研究論叢』(1993年号)および原稿が再掲された『中日関係史研究』(2007年2期)の写真も、同時に掲載された。

今、なぜ『河北新報』が、このような紹介記事を書いたかであるが、それは筆者も関係しているのだが、「東北大学の中国人留学生受け入れの歩みを伝える史料として、東北大学が今秋開設する予定の<魯迅記念展示室>への寄贈を検討している」事情があったからである。東北大学では昔、中国の文豪・魯迅と恩師藤野巖九郎の交流が有名であり、それを素材に太宰治が名作『惜別』を書いた。また、留学百年の記念行事や関係史料の展示などを行ってきた。留学当時の階段教室も「歴史建造物」として保存され、江沢民主席や中国大使も訪れるなど、今日も日中学術・文化交流の重要なスポットとなっている。そこで、大学構内の施設整備にあわせ、留学生教育のシンボルとして、常設の「魯迅記念展示室」の開設を準備しているのである。

『中日関係史研究』では、編者の付記として、こんな説明がある。「百余年以来、海を渡って日本で学問を探究する中国人留学生と日本人の間に、深厚な友情が結ばれている。魯迅と彼の恩師の藤野巖九郎の師弟縁が特に良い例である。――由基民先生の宇野弘蔵先生への追憶文を推薦されたことは、まさにもうひとつの例に当たる。」由基民と宇野弘蔵は、第二の魯迅と藤野であり、日中戦争前夜の師弟の固い絆である。また、東北大学の長い中国留学生教育の歴史の中で、尖閣諸島問題など、日中関係が再び緊張する中で、今日に生かすべき貴重な展示史料だと考える。

由基民氏の「追憶」を、是非再読して頂くとして、その意義について、ここで若干の私見を述べさせて貰うことにする。

## 1)

由基民氏のご遺族からの手紙によると、由氏が日本に滞在したのは、1934年から37年の盧溝橋事件の後までであり、東北大学法文学部経済学科には、35年から離日まで在籍されたようである。周教授も、当時の事情を「日中戦争の直前の大学の雰囲気や、真理を守り、中国人留学生と心で交流する宇野教授の人間像が、紙面からありありと浮き上がってくる。日本の進歩的な知識人が持っていた情操と学問を、ある側面から反映しているといえよう。中国人留学生の歴史においても資料価値を持っている。」昔、宇野教授からも、東北大時代に中国人留学生と交流していた話は、何度か伺った記憶があり、それを懐かしんでおられたようだが、まさかそんなに深い交流があったとは、筆者も知らなかった。もう少し、いろいろ具体的に当時の様子を伺っておけばよかった、と後悔する次第である。

「追憶」では、日本に来るまで由氏は、宇野教授の名前を知らなかったようだが、「マルクス主義経済学者として高名な河上肇元京都帝国大学教授が逮捕されて程ない当時、日本政府が毎年のように全国の進歩的な勢力を追放したり鎮圧したりしていたので、京都帝大にある左派の教育活動を行う<陣地>も日に日に弱まる兆候を示していた。ただし、この

時にもうひとつの新たな陣地が引き続いて密かに現れた。仙台にある東北帝大がそれである。宇野先生はこの根拠地の立派な一員だった。時間割上、彼が担当していたのは<経済学原論>であったが、授業で教えたのは『資本論』であった。」

東北帝大法文学部経済学科を選択した理由だが、すでに東大経済学部は森戸事件など内部対立を重ね、京大も上記のような有様だった。由氏たち中国留学生の目から見ると、東北大学の経済学科、特に宇野弘蔵の存在が、新たな第3の「陣地」だったのであろう。実際、戦前の東北大学の誇るべき伝統は、まさに「開かれた大学」であり、「開放されたアカデミー」の特徴を持ち続けていた点である。それは、すでに戦前、大学入学が女性にも開放されていた「男女共学」だけではなかった。当時の経済学科の学生には、他の大学や旧制高校などで、退学処分を受けて勉学の機会を失った「傍系入学」の学生が沢山いた。それらの学生が卒業後、大学の教師や経済界、官界などで、特に戦後になり大活躍した事例を挙げれば切が無いくらいである。

そうした東北大学の「開かれた大学」の伝統が、女性や「処分学生」だけでなく、海外からの留学生、特に満州事変後の、そして日中戦争直前の、中国からの留学生にも開かれていたのだ。この点は、日中交流の伝統だけでなく、東北大学が魯迅と藤野先生の時代から、いわば留学生教育の原点として、大切に守り続けてきた長い伝統として確認しておかなければならない。教育の価値は、平和の価値と一体化され、国境を越えて守り育てられなければならない。その意味で「追想」が、過去から未来への日中交流の貴重な展示資料として、大きな価値を持つものと考えている。

## 2)

「追想」では、当時の中国人留学生の目から見た、本多光太郎学長をはじめとする東北大学の姿が生き生きと描かれていて興味深い。同時に当時の留学生の様子も具体的に書かれている。現在も、全国の大学の中で、東北大学は中国からの留学生の数が多く、トップクラスである。さらに、教員クラスの比率が高く、東北大学の研究そのものが、今日では中国人関係者によって支えられていると言っても、言い過ぎではない位だ。冗談だが、留学生の団体の代表に選ばれると「今度、中国村の村長になりました」と挨拶するそうだが、東北大学の地域的特性は、中国との関係が特に深い点にある。

当時の宇野先生との交流も、由氏の個人的交流ではなく、「我々中国人留学生は、勉強に関する疑問に答えてもらうため、しばしば連れだって宇野先生を訪ねた。」この師弟の交流が、マルクスやレーニンの受け止め方を中心に、生き生きと温かい描写で伝わってくる。こうした留学生との国際的交流を通して、また宇野理論が東北大学で形成されたことを思うと、実に感慨深いものがある。帰国して抗日革命運動に参加すべきか否か、そうした課題を背負った緊張関係が、宇野理論の形成と無関係ではなかったことを想起したい。

それにしても多数の留学生が、宇野先生の研究室や自宅にまで押し掛けていたのであろう。留学生達は、一方で先生の話の参考をしながら、盧溝橋事変の勃発に際して、中国への帰国の選択を迫られていた。「仙台の留学生にも、少数とはいえ上記の現象（帰国するか否かの選択）が存在していた。意見を交わした結果、帰国という行動こそが、動揺に反対し抗日戦争を促進する意義と効果を持つという認識に一致した。こうした結論になったのは、ある程度、我々の同窓会（学生会）が構内に部屋を一間所有していたおかげでもあ

る。この部屋は普段、各学部（当時、医学、数学、化学、冶金、法学、哲学、経済の各学科にも中国人留学生がいた）の学生が、話し合ったり、集まったり、中国の新聞を閲覧する場所であった。――自由な議論の中で前述の一致した認識が得られ、即日、体の弱いもしくは荷物が多い人を優先的に帰国させることに、同窓会が協力することを決めた。」

この中国人留学生の「学生会」、そして「学生会」部室について、これから調べて見たいと思っている。当時、それだけの組織的動きがあれば、公安警察の動きがあつて当然である。「追憶」では、2足の革靴の盗難にかかわる「遺憾な一事」について書いているが、それが単純な泥棒だったのかどうか？「学生会」や宇野先生の周辺に、権力の不気味で不穏な影を感じざるを得ないと思う。こうした事件を、当時の宇野先生が知っていたかどうか？ご存じ無かったかも知れない。留学生達が、警察の不穏な影を感じていたからである、中国への帰国に当たっての宇野先生との「惜別」も、魯迅と藤野先生との別れとは違った、慎重な配慮が必要だった。

「我々が日本から去る際、宇野先生にお別れを告げようと提案した学生がいたが、多くの学生は、その必要はない、普段から宇野先生は何かささやかなことでも警察の監視対象になると言われており、今日の情勢では殊更で、宇野先生に迷惑を掛けない方がいいのではないかと主張した。一人の日本人学生にメッセージを残し、彼に惜別の意を伝えてもらうことを頼んだ方が良い、ということになった。」この、もう一つの「惜別」が、どのように宇野先生に伝えられ、先生はどのように受け取られたか。留学生たちの慎重な配慮にもかかわらず、その後、間もなく宇野先生は「教授グループ事件」で逮捕された。そして、宇野先生の側もまた、留学生達への断ちがたい「惜別」の情を、戦後になっても抱き続けておられた。自伝を兼ねたとも言える座談形式の『資本論五十年』、第9章「東北大学の先生、友人、学生』の最後で、忘れえぬ思い出を書き加えている。

「いままで話す機会がなかったが、昭和十年前後にどういうわけか、東北大学のぼくらの学科には、それまでは少なかった中国の留学生が急にふえてきた。たいていは省からの選抜の留学生らしかったが、その中の二、三人を除いては、皆『資本論』を英語か日本語で勉強していて、ぼくの家にもよく三、四人で連れだつてやつて来ていた。非常に真面目な勉強家だった。まだ日本語が十分にできないのもいたが、またたくうちに上手になった。ぼくの家へ来るとき連れだつてきたのは、日本語が十分にできないというせいでもあったかもしれない。昭和十二年の夏、事変の始まったあとで、八月か、九月だったと思う、もう最後の船になったというので、ぼくは大学の正門の前で別れるとき、この機会に引き上げて帰るようにすすめたのを覚えている。おそらく帰つたのだろうと思うが、それから消息を全然聞かない。この三十年どうしていたことかと、ときに思うことがある。いつかぼくの家に来たとき、それは事変が七月に始まった直後ではないかと思うが、今度はこれまでのように簡単には片付かないでしょう、といていた。爾来、この言葉は忘れられない。一人か、二人でも、今も元気でいてくれるなら会ってみたいと、ときどき思うことがある。あの動乱の中で、あるいはもうみんな亡くなつてしまつてしまつているかもしれない。」

### 3)

最後に、由氏など中国人留学生の聴講した宇野先生の授業「経済学原論」について書いておきたい。講義名は「経済学原論」ではなく、正式には「経済原論」だと思われるが、宇

野先生の担当の講座は「経済政策論」であり、すでに戦前1936年に『経済政策論』上巻として、資本主義の歴史的発展段階を重商主義、自由主義の段階までまとめられていた。さらに帝国主義の段階まで講義されていたようだが、『資本論』を基礎とした「経済原論」は、それまで一度も担当されていなかった。ところが、1936年度一年間だけ、当時の「経済原論」講義担当者の健康上の都合で、宇野先生が代講された。その講義を中国からの留学生が聴講したと思われるので、ニュースレターの「あとがき」で柴垣氏が注意されているが、由氏の記述は「経済政策論」の誤りではない。まさしく『資本論』に基づく宇野「経済原論」の講義だったのである。

例年行われていた「経済政策論」の段階論に対して、この1年間だけの「経済原論」の講義によって、初めて原理論が提起されたのである。この時点で、原理論、段階論、現状分析のいわゆる「宇野・三段階論」が明確化するという、まさに記念碑的な講義だった。その講義を、由氏など中国人留学生が聴講するという幸運に恵まれたのである。また、その時の様子が「追憶」で具体的に伝えられたことは、我々宇野理論の研究者にとっても、史料的に非常に貴重だし、また大きな意義を持つものと思われる。

なお、講義内容が、聴講生の手で東北帝大法文共済部発行の講義プリントとして残され、『宇野弘蔵著作集』別巻に収録されている。それを見ると、戦後の『経済原論』の骨格、内容が、すでに講義に示されている。流通論・生産論・分配論の編別構成、価値形態論の重視、資本の生産過程での労働価値説の論証など、この時点で明確に提起された。ただ、生産論の構成で、資本の流通過程の位置づけが異なり、特に資本の回転は、分配論の第一章利潤の中で説かれている。細部の取り扱いを除けば、「資本主義社会は商品形態を以て、全社会的生産関係を統一的に規定する機構を完成するのである。」まさに、『資本論』の純粹資本主義の抽象による自律的法則性の解明が『経済原論』で果たされていたのだ。

「原論の講義は、法文学部の一番教室で行われるのが慣例で、それに『資本論』についてのこの十年間の研究を話してみるのだという意気込みなので、聴講者も多かった。」中国人留学生と一緒に、その時一番教室の席を占めていた当時の日本人学生の一人、斉藤晴造教授が思い出を込めた「解説」に書いている。例年行われていた担当の「経済政策論」、それを資本主義の歴史的発展段階として説き、特に『帝国主義論』『金融資本論』を段階論として位置づけようとするれば、同時に『資本論』は純粹資本主義の抽象として、自律的運動法則による「統一的に規定する機構」解明に絞り込まれる。1936年、『経済政策論』上巻の刊行が、同時に「経済原論」の生誕だったのは、必然だったのだ。それはまた、宇野・三段階論の方法の明示的な提起でもあった。

当時の東北大法文学部のアカデミズムの土壌は、じつに豊かだった。『資本論五十年』では、河野与一氏の示唆によりスピノザ『エチカ』の二元論が「政策」の「原理」からの分離に役立ち、また原論の構成については、武市健人氏とのヘーゲルの『ロオギーク』をめぐっての議論などを挙げている。そして、十年余の法文学部での充実した研究と教育の成果として、宇野・三段階論が産み落とされ、図らずも1936年の時点で著書および講義として発表をみた、と整理できるのではないかと？また、その画期的な発表の場に、何人かの中国人留学生が聴講の機会を得ていたことの意義も、ここで確認できるのではないかと？

由氏をはじめとして、多くの留学生が帰国し、中国革命に参加したであろう。その革命実践に、宇野・三段階論がどのような影響を与えたのか？中ソ論争、文化大革命、改革開

放、ソ連崩壊、そして「和諧社会」への路線転換、大きな変転が繰り返された中国の革命路線だった。市場経済と外資導入の全面化にも拘らず、今なお①土地の公有化、②戸籍制度の維持（農民工）、③外為・金融のコントロールなど、「労働力商品化」による資本主義の基本矛盾止揚の方向は守られている。中国革命の宇野理論による検証を、我々も怠るわけにはいかないと思う。

以上。